
事業報告

公開講座概要

「開かれた高等教育機関」「特色ある高等教育機関」として地域社会での文化的リーダの役割を果たすべく努めて来た本学では、昭和44年開学以来、いち早く公開講演会を実施、地域住民とのつながりを深めてきた。昭和55年度からは、文化講座と改め、メインテーマを設けて、毎年秋に5～6回講座を開いて来た。メインテーマは「万葉の時代」（昭和55年）「奈良文化の源流」（昭和56年～58年）「大和の自然と文化」（昭和59年～61年）「シルクロードをたどる」（昭和62年～63年）「伝統文化を考える」（平成元年～2年）などで、第12回目の平成3年度は「大和の文化を創った人々」をメインテーマとし9月14日(土)から10月19日(土)にかけ奈良市東向中町28 奈良近鉄ビル4階の奈良歴史教室で5回にわたり開講され183名の受講者（延べ出席者647名）が参加、うち82名が全講座を受講した。

一方社会学部でも昭和63年4月創設とともに積極的に公開講座を検討、開講してきた。

初年度は「経営の革新と新しいリーダシップ」などをテーマに3回、翌平成元年度は「婦人労働を考える」をテーマに9月、4回にわたり行われた。

平成2年には「職場の活性化とリーダシップ」と題し奈良工業会と共催、企業の管理監督者を対象に3回にわたり開かれた。

平成3年は従来と多少趣向をかえ「新しいライフデザインを考える」－女性がエキサイトする社会にむけて、家庭、地域、職場からの構想－をテーマにパネルディスカッション＋フォーラム形式で9月14日、奈良県文化会館で開かれ、127名の参加者を得て、盛会裏に終わった。

平成3年度に実施された各講座のテーマ及び講演要旨はつぎのとおり。

平成3年度

文化講座

9月14日

『教訓抄』と狛近真

笠置侃一

狛近真は鎌倉時代の南都の舞師で、雅楽書の原典として貴重な『教訓抄』の著者として名高い。後には宮廷の楽人として従五位上左近衛将監になり、楽所の一ノ者として当時の狛氏一統の秘曲を一身に集成した人である。

しかし、その当時は源平の争乱に続いて武家政権が生まれ、雅楽は衰微の一途をたどり、嫡家相伝もままならない時代であった。『教訓抄』十巻は、このような時代背景に加えて、三人の子息がありながら長男、二男は雅楽の道につかず、三男は当時わずかに二歳という事情によって、近真57歳の時に著わされたものである。

この序文は美しい名文で綴られていることでも有名である。その中に「——道ニスカズシテ徒ニアカシクラス事、宝の山ニ入りテ手ヲムナシクシテイニナムトス。——」といい、また「——予カクレナムノチハ、メクラノ杖ヲウシナヒタルカコトクニテ、天ノウラミ侍ヌラム。スエノ世ニミルヤウニ侍トキニ、モシ心得ルハシトモナレカシトテ、十巻抄ヲツクリテ教訓抄ト名タリ」とあることが、当時の事情を物語っている。おそらく断腸の思いで書き綴られたにちがいない。

このような近真の止むにやまれぬ気持ちのあらわれであろうか、すべてが非常に丁寧、親切に説かれている。単なる記録や一般の著書とは大いに趣を異にしている所以である。現在、雅楽の伝承を記した書物や楽譜や舞譜なども数多く伝えられているが、この『教訓抄』を原典として著わされたものが多く、『教訓抄』がいかに貴重なものであるかがわかる。

伯近真は仁治3年(1242)正月25日に卒した。66歳であった。いま、奈良公園の入口、奈良県庁東交差点の北東角の「拍子神社(ひょうしじんじや)」に祀られている。「ひょうしの神」ともいわれ、芸能の守り神として一般に尊崇されている。

9月21日 東大寺復興と重源上人

岡 田 英 男

平安時代末、治承4年(1180)南都を襲った平重衡の軍勢は、東大寺と興福寺を焼払い、聖武天皇発願の大仏殿院は灰燼に帰した。

興福寺では朝廷、藤原氏の氏の長者、寺家により復興が伝統的な様式により進められた。しかし極めて大規模の東大寺の復興は容易なことではなかったが、俊乗房重源上人が勸進職に補われて復興事業が一任された。

重源は醍醐寺で出家し、諸国を廻り、大峯、熊野などの山に修行を積み、入宋3度と称し、高野聖の一人として勸進の実績を持ち、阿弥陀や仏舎利を深く信仰し、南無阿弥陀仏と称した。

養和元年(1181)61歳の時、東大寺造宮勸進の宣旨を受け、東大寺造宮の一切を引受け、諸方に勸進するとともに、まず大仏の修造に着手、宋人陳和卿、日本の鋳物師草部是助らを登用し、文治元年(1185)に開眼供養が行われた。同2年(1186)には周防国が東大寺造宮料にあてられ、物部為里・桜島国宗を大工として山口県防府市奥の柚に自ら入り、巨材を伐り出し、佐波川に多くの堰を作って運び出した。

建久6年(1195)に大仏殿が完成、後鳥羽上皇、源頼朝らが供養に参列した。時に重源75歳、この時に大和尚の号を賜わった。

重源は再建に当り、奈良時代建築の流れを継ぐ伝統的な技法によらず、全く新しい大仏様と称する構造手法を採用した。東大寺復興のほか各地に別所を経営し、多くの社寺の復興を援助し、その事蹟を自ら「南無阿弥陀仏作善集」として録し、建永元年（1206）に86歳で没した。

復興事業の経過と大仏様の特色、国宝浄土寺浄土堂の残る播磨別所等の経営も含め、重源の偉大な業績のあらましと大仏様の影響を紹介した。

9月28日 天 武 天 皇
— 日本神話の組み立ての面から —

松 前 健

天武天皇と『古事記』との関係は、太安万侶作とされるその序文中に記されていることであるが、その序文の真憑性の問題や、『日本書紀』の天武10年の記事に見える、中臣大島らによる「帝紀および上古の諸事」の「記定」の記事との関係の有無の問題などが、長い間研究者の重要な論議の焦点であった。私はこの問題をいささか離れて、『古事記』神代巻の全体の構成の面から天武との関係を考えて見たい。

松村武雄がかつて『記』『紀』の神代巻の構成について、説話群が空間的に横に接続することなく、すべてが時間的・因果的に縦につながり、究竟には、皇祖神アマテラスの絶対性やその子孫の「日の御子」による国土統治の由来を語る、一貫した筋立てになっていて、全体が整然と配列されていることを指摘し、これが、ある時期の大和朝廷の少数貴族による作成だと断じたことは、妥当であるが、但しそれは、『記』『紀』を通じての共通特色ではなく、『古事記』のみに見られる構成なのである。『日本書紀』の神代巻は、各章・各段ごとに、朝廷公認の伝承を立て、これを本文とし、これに数多くの氏族伝承らしき「一書=曰ク」の説話をならべている。また各章の本文間には、何の連絡も因果関係も見られず、互いにばらばらである。この『日本書紀』の構成は、明らかに会議制によって編纂されたもので、各章ごとに編纂指導者が変わり、そこでの基準を定めて、「本文」を定め、後は史料提供者や会議参加者の顔を立てて、そのまま「一書曰」という形でならべたものである。これから見ると、『古事記』の方は、あらゆる異伝を、国家的理念の下に、ぱっさりと切り継ぎ一貫させ、寸分のすきもない。「記序」に、天武帝が帝紀・本辞を、「削偽、定実」という形で、切り継ぎしたという記事と一致する。こんな点からも、天武10年の「記定」の記事は、明らかに会議制によったもので、『古事記』とは関係ない。

舎人稗田阿礼の誦習とは、こうして出来上った天武の独創による「原古事記」の文を、声にふしをつけたり、アクセントをつけて、繰返し覚えたことであつたろう。この男女論争が古くから問題にされたが、恐らくこの人物は、天武の死後、死亡していたから、和銅の編纂のころは、性別さえも不明となつたのだらう。それにしても、この愛女氏は女性色の強い家であつたから、アメノウズメを祖神とし、『古事記』の中に大活躍をさせている。アマテラス神話を、

あれほど大きいものとした『古事記』は、恐らく瓊女君氏が伊勢から持ちこんだものであろう。この大神の崇拝が、宮廷とのつながりを持ったのは、やや古く、6世紀の継体朝ごろと思われるが、もっと具体的になって、より古くからの皇祖神タカミムスビを押しつけて、高天原パンテオンの主神となったのは、天武朝だと思われる。

天照は壬申の乱のとき、神異を現じて、天武を助けた。乱後天武は斎王制を再興し、伊勢神宮を国家の大廟と定め、この神を中心とする神統譜を作り、その理念の下に、新しい神話体系を打ち建てようとして、「原古事記」の編纂を志したのであろう。『日本書紀』には、これほどのアマテラス的色彩は見られない。天孫降臨のときの命令者ですら、アマテラスではなく、タカミムスビとなっているのが、『日本書紀』本文の伝承なのである。

この天武の遺志を継いだのが、その大後の持統女帝であり、その理念を、祭祀制度として打ち建てようとして、律令制が整備されて行ったのである。柿本人麻呂などの宮廷歌人も、その理念の大きな宣伝者であったと言えよう。

10月12日 道慈・玄昉・良弁

水 野 柳 太 郎

鎌倉時代初期の応長元年（1311）、東大寺の碩学凝然は、印度・中国・日本を覆う浩瀚な仏教史『三国仏法伝通縁起』を著わした。日本については、南都仏教の中心である三論宗・法相宗・華嚴宗について、詳細な記述がある。

三論宗を伝来した僧侶には、第一伝に慧観僧正、第二伝に智蔵僧正、第三伝に道慈律師があるとしている。法相宗には、第一伝に三蔵法師玄奘に学んだ道昭和尚、第二伝には同じく玄奘に学んだ智通・智達両法師、第三伝に新羅から渡唐して智周に学び来朝した智鳳・智雄両法師がある。華嚴宗には、天平8年（736）に来朝した唐の道璿があり、5年後に講演した審祥と、興隆した良弁がある。ここに選ばれた道慈・玄昉・良弁らの高僧は、いずれも僧綱に入り、国家仏教に重要な位置を占めたが、一方ではときの政府と対立もしたようで、南都仏教の成立を考えるうえに欠くことのできない人物である。

道慈は、大宝元年（701）に遣唐留学生として唐に留学し、三論旨学んで養老2年（718）に帰朝した。このとき、国分寺や東大寺大仏の建立に大きな影響を与えた護国教典、義浄が印度から将来し新訳された『金光明最勝王経』を舶載し、釈門の秀と讃えられた。大安寺に住み、造営にあたるとともに、僧綱の律師として当時の日本仏教の在り方を批判し、指導的立場にたっていた。

玄昉は、霊龜2年（716）入唐し、法相を学んで、唐に存在した仏教教典すべて五千巻あまりを携えて帰朝した。これによって、日本に教典が完備し、多くの一切経が書写されている。入唐帰朝をともにした吉備真備とともに、橘諸兄に重用されて僧正となり、藤原宮子の看病に成功したが、栄達を嫉まれ、藤原広嗣の反乱の目的に真備とともに除く対象とされている。乱後、

天平17年(745)に太宰府の観世音寺におもむいて、造寺にあたることとされたが、不審の死を遂げている。文武天皇夫人藤原宮子との醜聞で知られるが、事実ではないらしい。帰朝後は興福寺に住んで、興福寺法相宗を確立した。

良弁は、子供のとき鷲に攫われ、二月堂前の杉にかかっていたという伝説で知られるが、後世のものである。しかし、経歴は伝説的で、相模国出身らしい以外は、よくわからない。華嚴宗の発展に努力し、東大寺建立に最初から尽力して、僧綱の僧正にいたった。三月堂の建立にも良弁が関係しているようである。

10月19日 吉野川分水をめざした人々

野 崎 清 孝

「大和豊年米食わず」これは、他国が豊作のとき奈良盆地が水不足に悩み、早魃に苦んだという意味のことばである。奈良盆地の水不足は、降水量が少ないというよりも河川が短小で乏水性のためである。したがって河川灌漑には、あまり依存できないため多くの溜池づくりを必要とした。溜池数は13,712、57.7パーセントまでが溜池灌漑によっていた。溜池灌漑への依存度は香川県に次いで全国第2位であった。さらに奈良盆地の村が領域観の強いことも水不足に拍車をかけた。ために井手掛りにしろ池掛りにしろ番水制などのきびしい水利慣行が生まれた。

ところが奈良盆地がどんなに水不足に苦しんでいるときでも龍門山地の南にはとうとうと流れる吉野川の流れがあった。この水を奈良盆地にもってくれば、どんなに助かるであろうかと考えるのは自然のなりゆきであった。

元禄時代、葛上郡名柄村の庄屋高橋佐助が試みたという伝説以来たびたび構想がめぐらされた。計画は、そのたびごとに挫折し、実現をみるにいたらなかった。吉野川分水がようやく実現したのは吉野熊野総合開発事業のなかにおいてである。

多年の宿願は、昭和31年7月になってようやく達成されたが、その経路をたどり、実現に至った経緯を平易に解説した。